

【主題】 感触遊びがもたらす効果

【副題】 ～好奇心を刺激し、夢中になれる感触遊びを楽しもう～

【校・園名】 なごみ保育園分園

ばんび組(0・1歳児)

はじめに

今年度バンビ組では、感触遊びに焦点を当てて活動に取り組んできた。入園・進級当初制作が苦手な子が多く、絵の具を手で触ることを拒んだり、なかなか制作に意欲が向かなかったりする様子が見られた。一緒に制作を行ったり援助をしたりするだけでは苦手克服には繋がらず、制作に意欲が向くようにするためにはどのような方法がないかを考えた。子どもの興味がある遊びを探していくうちに「感触遊び」に子ども達の多くが興味を示していることに気づいた。様々な感触遊びを楽しむことで制作への苦手意識が減り、興味関心に繋がるのではないかと思います、この研究テーマに取り組むことにした。

内容・方法

<春>(4・5・6月)

4月・5月の制作時に足形・手形を絵の具を使って行った。

初めての感触に「嫌だ」と拒否反応を示す子や、制作を行う前から「やらない」という子が多くいた。絵の具が手に付くと泣いたり、嫌そうな顔をしたりする姿も見られた。



<初めての感触に戸惑っている様子>

6月には氷遊びを行った。

始めに氷を口に入れたり、投げたりしないように約束ごとを伝え楽しく遊べるようにした。

大・中・小と大きさの違う氷を用意すると、「大きいのがいい～」と自分で好きな氷を持ち「つめたいね～」と氷の感触や冷たさを楽しんでいる姿が見られた。氷をずっと手に置いておくと溶けることに気づいたKちゃんは「お水になっている」と実際に手の平で溶けて水になっている氷を見せてくれた。それを見た他の子たちも自分でもやってみようと氷を握ってみたり、手の平に置いて溶ける様子を見つめたりして観察を行っていた。

楽しんでいる子がいる一方、氷の感触が苦手な子もいた。Tちゃんは氷を握ってみるものの冷たさに驚いた

のか泣いていた。U君は最初は氷に興味を示していた

が、氷を触ってみて冷たい感触に驚いたのか遊ぶのをやめてしまう姿が見られた。その後、保育者が遊びに誘ってみるが氷を触ろうとしなかった。



<氷を握っている姿>



＜溶けてきた氷に興味を示している様子＞

＜夏＞（7・8月）

7・8月は水遊びやスライム遊び、小麦粉粘土などを中心に活動を行った。

「水遊び」

初めての水遊びでは、水に怖がる子もいると予想されたため、大胆に遊べるスペースと、落ち着いて遊ぶスペースと、二つの場所を設置した。

大胆に遊べるスペースでは、初日にシャワーをかけても平気な様子で、コップを渡すと友達同士でも水をかけ合う姿が見られた。小さいスペースでは、ジョウロを使って控えめに遊んでいた。4人ほど、水遊び中に涙が出る子がいた。

Nちゃんは、お着替えのために部屋移動をただけで涙が出ていた。そのため、服を着たまま少し水に触れたり、その部屋を経由せず、外から水遊びの場所に向かったりと工夫をすることで、涙を流さずに過ごすことが出来た。

（Nちゃんの様子）



Tちゃんは繰り返し水遊びを行うと慣れてきたようで、自分からタライの水に触れるようになった。

（Tちゃんの様子）

初めての水遊び



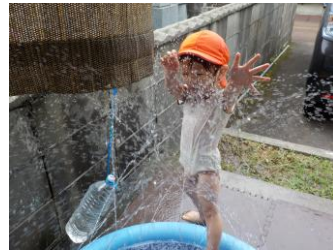
1カ月後



その他にも子どもたちが水遊びを楽しめるよう、以下のような遊びを行ってみた。

① シャワーマット

ダイナミックな遊びが好きなお友だちは、喜んで水の中に入っていた。まだ歩行が出来ない子も、座りながら楽しむ様子が見られた。



② 泡遊び

フワフワの感触にタライごと入ったり、手のひらに泡を乗せたり、溢れた泡の上を歩いたり、全身で感触を楽しむ様子が見られたしかし、慣れていないのもあり、嫌がる子もいた。また、色付きの泡も、女の子は喜んでいた。



③ フィンガーペイント・色水遊び

分園の駐車場に、テントと机と模造紙を設置し、その下でフィンガーペイントを行った。子どもたちの手のひらに絵の具を付けると、2人ほど、全身に絵の具が付くほどダイナミックにフィンガーペイントを楽しんでいた。しかし、初めての経験にほとんどの子が嫌がる素振りをし、すぐに水遊びへ向かってしまった。

また手に絵の具が付くのを嫌がった二人の子は、筆を渡すと喜び、筆を使って模造紙に絵を描くことを楽しんだ。そのうち絵の具の色を混ぜていくことに興味が出たようで、色を混ぜては「ぶどうジュース！」と見立て遊びを楽しんでいた。



「感触遊び」

① 夏のスライム遊び

7月、初めてのスライム遊びを行う。全員が不思議そうな表情をしていたが、食紅を使用し、「赤」「青」「緑」などの色も作ったことで、色を混ぜながら全員が楽しむ姿が見られた。初めての物が苦手なU君や、水遊びでは涙を流していたA君も、ツンツンと触ったり、握ったりして楽しむ姿が見られた。またスライムがゆるい日は、手について離れないのが気になり、集中できない子が多くいた。水やホウ砂水の量の調節に気を付けていくと良いことに気が付いた。



② 小麦粉粘土

小麦粉に水を混ぜるところから子ども達に見てもらい、完成するとニコニコと嬉しそうな姿が見られた。そのまま小麦粉粘土を楽しむ子もいたが、触れずにいる子もいた。保育者が粘土で作品を作ると、興味を持ったのか触ってみる様子がみられた。R君は少し触ると手の汚れが気になったようで、すぐに洗って遊びに集中することが出来なかった。

スライム遊びも少し前に行っていたため、嫌がらずに色の付いた粘土を組み合わせたたり並べたりしながら集中して楽しむ子も多くいた。



<秋> (9・10・11)

だんだんと涼しくなり、秋は砂遊びを行った。また、室内では、春雨や紙粘土などの感触遊びも行ってみた。

① 砂遊び

初めての砂遊びは、いくつか砂遊びのおもちゃを持って、よく遊んでいる愛宕公園で行った。日頃から感触遊びを行っているからか、砂を嫌がる子はおらず、

ほぼ全員が遊具ではなく、砂遊びに集中する姿が見られた。帰り道では「楽しかった」の声が聞かれた。

園庭で遊ぶと砂遊びが気になる様子だったため、園庭でも砂遊びを行った。道具を使って集中して遊ぶ子や、ダイナミックに遊ぶ子などがいた。また、保育者が砂山を作ると、興味を持って一緒に作ろうとする子がいた。一方、壊すことが楽しい子もいるため、大きい山を皆で作るというのはまだ難しい遊びであった。



② 春雨遊び

おままごとで使用するおもちゃの包丁やお皿を使って春雨遊びを行った。全員が興味を持って、抵抗なく触る姿が見られた。フライ返しを使って炒める真似をしたり、「まぜまぜ～」と混ぜたり、ごっこ遊びを喜んで行う姿が見られた。この感触遊びでは一緒にスライ

ム遊びも行ったが、約1時間近く全員が飽きずに遊びこむ姿が見られ、感触遊びを楽しむことが出来る子が増えたように感じた。

③ 紙粘土遊び

散歩時、子どもたちの中から「どんぐりあるかな～」という声が聞こえたため、皆でどんぐり集めを行った。そのどんぐりと紙粘土を使用し、どんぐりケーキ作りを行った。感触遊びに慣れている為、全員が意欲的に紙粘土に触れる姿が見られたが、0歳児には硬くてこねることに苦戦したり、手が白くなるのが気になる子の姿が見られた。こねることが難しい子に対し、保育者が机に紙粘土を叩いて形を変える様子を見せると、真似をして楽しむことが出来ていた。手が白くなるのが気になる子は、「ドーナツを作る!」と初めに意気込んでいたため、保育者が一つ作ると、自分も作りたいと触るようになった。初めての素材に戸惑う姿もあったが、一人ひとりの困っていることを援助することで、みんなが楽しくケーキを完成させることが出来た。また自分で作ったケーキに色を塗るため、好きな色のケーキにしたり、隅々までよく見て色を塗ったり、最後までこだわって制作を楽しむことが出来た。



④ 秋のスライム遊び

11月にもスライム遊びを行った。スライム遊びにすぐ飽きてしまっていた子も長時間集中して遊ぶことが出来るようになった。また、スライムに型を押し付けると形ができたり、頭や顔にスライムをくっつけたり、遊び方が夏の頃よりも多様になってきた。

<冬>(12・1・2・3月)

冬は新しくパスタを使ったり、新聞紙を使ったりして感触遊びを行った。

① パスタ遊び



パスタ遊びでは、2～3種類のパスタを使用した。まず初めに、茹でる前の硬いものを子どもたちに渡した。ポキッと割ってみたり、触ってじっと見てみると、興味を持って触れる姿があった。その後、茹でたパスタを配ると、豪快に握ったり、お皿に入れたり、楽しんで遊んでいた。感触遊びが苦手だったSくんも、身近な食材という事で抵抗感なく、長い時間遊び込む様子がみられた。



途中で食紅で色付けたパスタも用意すると、1歳児の子ども達はそれをトッピングに見立て、盛り付けたパスタの上に飾りつけて楽しむ姿も見られた。片付けを促すものの、「まだやる!」との声も沢山聞かれ、子どもたちの夢中になった感触遊びの一つとなった。色付けたことで、「あか!」等色の名前を言う子もあり、色への興味も高まっている様子がうかがえた。

② 新聞紙遊び

まずは子どもたちに新聞を一枚渡し、新聞紙の感触を楽しめるようにした。保育者の真似をして、新聞紙を丸めたり、ちぎったりと試してみる姿が見られた。ちぎった新聞紙を集めて、上に投げると、「雨〜!」と1歳児の子ども達は想像を膨らませながら楽しんでいた。チラシで作った靴や帽子を身にまとい、友達同士で対話しながら遊んだり、鬼が好きな子は金棒を作ってもらい、鬼になりきって遊んだり、新聞遊びも回数を重ねるごとに子ども達の遊び方が広がっていった。



③ フィンガーペイント

制作で手形スタンプをした際に、まだまだやり足りなかったのか、「ペタペタしたい!」との声が沢山聞かれたため、後日、フィンガーペインティングを行った。紙いっぱい到手形を付けて楽しめよう、大洋紙を用意した。大洋紙に手形を何度も付けたり、絵の具が付いたところを手のひらで伸ばしてみたりと、夢中になって取り組む姿が見ら

れた。夏頃に1度行った際には、活動への参加を拒否する子が何名かいたり、今回行った際には全員が嫌がらずに喜んで参加することが出来ていた。手のひらだけでなく腕にまで絵の具を塗る子もあり、絵の具の感触を存分に楽しみながら取り組む様子が見られた。感触遊びの集大成として、子どもたちの1学期の頃からの成長や変化が大いに感じられた活動となった。



<まとめ>

1年間を通して感触遊びを取り組んできた。春の頃は手に絵の具が付いたり、制作活動を嫌がったりする子も多かったが、様々な素材を使った感触遊びを経験していくうちに、今まで苦手意識のあった子も、制作活動への意欲を見せ、自ら活動に入っていく姿が見られるようになっていった。今では「やりたい!」との声が沢山聞かれるようになった。普段遊びにすぐ飽きてしまう子も、感触遊びであれば、長い時間集中して楽しむ姿も見られ、新たな発見があった。

また、あまり玩具や周りの物に対して興味を示さなかったTちゃんも、保育者が用意した身近な素材に触れて、握ったりちぎったりという経験を重ねていくにつれ、自分から興味を持って物に手を伸ばすようになった。感触遊びは、直接触れたり見たり嗅いだりあしていく中で、五感を刺激し、子どもたちの興味や関心を上げていくことが出来ると感じた。制作への意欲に繋がったり、興味関心の高まりのきっかけになったりと、感触遊びを通して様々な変化や効果があることが感じられた研究となった。